■卒業論文概要■

宇治山哲平 ―独自の画風と過程を巡って

■宮崎俊満■

はじめに

○△□などの幾何学的な形態を用いた独特の画風の宇治山哲平がそこに至るまでの段階を考えていく。そして、そうした独特の作品を理解するために彼の活動の軌跡と用いられた言葉を参考に考察していきたい。彼の活動期間を版画制作から始まり油彩に転向するまでを「初期・版画期（一九三〇～一九三八）」とし、油彩に転向し具象画から半具象との過程を経る期間を「油彩・実験期（一九三九～一九六一）」とする。そして、その後の彼独特の幾何学形態を用いた作品が制作されるようになってからとそれに伴う活動を「油彩・完成期（一九六二～一九八六）」として、その活動期間を区別しておく。その上で活動期間との関連や本人の言葉をもとに、絵画論・芸術論を考察し、作品理解のための足がかりとしたい。

1　独特の画風へのステップ

宇治山が晩年に至り、幾何学形態を用いた独特の画風を築くまでのステップが二段階あったと考える。活動期間の分別ともかぶるが、版画での制作と油彩での独自の境地に至る前までの実験とも呼べるべき期間が本人の資質的な要素と、技術的な要素と絡み合い、それぞれ二段階のステップを踏み独自の境地を切り開くに至ったと言っていいだろう。

まずは一段階目として、油彩への転向があげられる。一九三八年に木版画《錦渓》が第十三回国展に入選する。その際に当時の仕事の出張と重なり、自らの作品が展示される展覧会を見に行く機会ができた。そして、展覧会会場に出向いた際に見たものは洋画部と版画部での展示スペースの広さの差だったという。元々の画架の大きさの差があるにしろ、洋画部の展示が盛大に行なわれているように思え、自分の作品のある版画部の展示は見劣って感じてしまったに違いないだろう。その差は画家として活動することへの誇りというべきか執着というべきなのか、そうした感情を強く持っていた宇治山にとっては油彩への転向を決

意させるのに十分な理由だったことは充分に想像できる。一段階目は資質的な要素と偶然とが重なったのが大きい。

次に二段階目として、油彩に転向してから独自の画風に至るまでの制作期間があげられる。技術的な面において、油彩に転向した後しばらくは版画制作の技法の影響がみられる。油彩に入ってからも風景のモチーフを多様する。版画では出来なかった表現、色彩や絵筆のタッチを活かした描写を、モチーフが同じとは言えど、画材が変わったために更なる表現の追求を行なう。その一方、版画での技術のノウハウも見受けられた。細密描写ではなく、適度な抜きとモチーフの特徴を捉えて画面に上手く描き出すという点では受け継がれる。それが、段々と画面上での表現の追求へと変わってくる。鮮烈な色彩の使用や形態のイメージを上手く使った構成により、具象的だった作品はキュビスム的な雰囲気の半具象となっていく。それが次第に、画面上でのイメージの表出を狙った表現として、さらなる画面構成と表現を追求していくようになる。古都の趣を残した奈良での活動もあり、イメージの表出、画面構成やマチエールによる質感の表現などにもよる技術を得ていったことが。二段階目は技術的な要素と資質的な要素が大きく影響している。

これらの段階を経て宇治山の独特の境地に至るための段階と考えていいだろう。

2 「純粋抽象」と「沸々たる静謐」

前述の段階を経て、宇治山独特の画風が完成していく。そうして出てきた言葉が「純粋抽象」と「沸々たる静謐」の2つである。これら二つの言葉は、宇治山が晩年において、その独特の画風を打ち立ててから用いることの多かった言葉だ。作品を理解するために解説して行きたい。

「純粋抽象」を本人の言葉をもとに解説していくと次のようになる。円や四角の簡潔な形と赤青黒などの鮮烈な色彩によって生気のある充実した空間の造形を行なうこととそのイメージや性質を伝えることになる。これは、宇治山の一種の絵画論と捉えてよいだろう。「純粋抽象」として美学美術史上での一般的な定義と呼ぶものとは違い、宇治山が制作活動の末に辿り着いた一つの理論としておくことが必要となる。「純粋抽象」でありながら、幾何学的な絵画空間の構成のみではなく、作品が構成された上で何かしらを表す具象的な要素も併せ持つのが宇治山の「純粋抽象」である。

次に「沸々たる静謐」ということについてであるが、これは宇治山が追い求めた美の境地と考えられる。しかし、言葉だけをみると矛盾してしまう。「沸々たる」は煮えてわき上がるという意味に対し「静謐」は静かで安らぐということである。宇治山が残した言葉によると「立派な作品ほど静謐で強い。その静けさの底に沸々たる精神が封じ込

まれているからである。」ということだ。この言葉には宇治山の様々な思いも込められているのだろうが、つまりはこういうことだろう。完成された作品は静かで強い存在感を持っている。その静かな様子の内には沸き立つような心の動きが感じられる。というように言い換えてみると少しは解りやすいのではないかと思う。その「沸々たる静謐の世界」を目指し制作を行なっていったという宇治山自身の言葉もあり、宇治山の作品からも「沸々たる静謐」を感じとることもできる。

本学本館に入って左側にある《風爽》という宇治山の作品がある。宇治山独特の形態の作品のために、気にかけてその場で立ち止まる人は少ないだろう。本館受付の落ち着いているがどこか厳格な雰囲気に感じられるのは、この作品によって形成されていると考えて良いだろう。

おわりに

従来言われている宇治山独特の幾何学形態と色彩による表現は晩年になってからである。その為にたどった段階は前述の通りである。とりわけ、「純粋抽象」とは言ったものの、宇治山の作品にはその形態に反して、作品中に見られる図形の配置や作品のタイトルからは具象的な要素も見受けられる。それは幾何学形態をとる宇治山の作品を理解するための重要な要素ともなる。一九七五年作の《歓》という作品においても、タイトルにみてとれるような人の顔の配置とその表情は喜んでいるようにも見える。こうして抽象的な作品でありながらも作品から得られるものが多いのが宇治山の代表的作品となる。その抽象形態によって見過ごしてしまいがちだが、「純粋抽象」と「沸々たる静謐」という2つの言葉を踏まえ作品と向き合うことで、作品に関する理解をより深めることができるだろう。

（芸術文化学科四年）